

人類の課題

今年は戦後80年である。しかも戦争により原子爆弾を広島・長崎に投下された唯一の被爆国として80年経つ。

言うに及ばず、戦争は絶対に起こしてはならないだろう。犠牲になった尊いのちの尊厳性を思えば、人間の暴力性によるこのような戦争は二度と起こしてはならない。洋の東西を問わず、有史以来、幾度となく繰り返してきた悲惨な戦争だからこそ、人類が問うべき最大の課題であると思う。

このことは誰しもが痛感しているものであろう。しかるに、なんということであろうか。この21世紀という新たな人類の幕開けの時代に入ってなお、世界中には、天変地異や疫病のパンデミックが絶えず、人間自身が苦しんでいるというのに、こともあろうに、核による脅しを以て、武力攻撃による戦争の現実がある。

独裁者が平気で自国の人間を兵役として搾取し、軍事侵攻を正当化し、無差別に徹底的に破壊を繰り返し、街を廃墟と化して憚らない。このような非人道的搾取や、信じがたい蛮行が、堂々とまかり通っているのである。

嗚呼！なんということだろう！専制国家のみならず、民主主義国家そのものが自国第一主義の横行によって深刻な分断と排他的差別を巻き起こし、まるで、世界中の人間が、これまでとは全く異なったレベルへと退行せざるを得ない状況に立たされている。

歯がゆいことに、いまもって、国連がまともに機能できない。横暴なもの達を前にして、全く無力である。一部の国の愚行ですら、誰も、それを止めることができない。ミサイルやドローンやインターネットを駆使し、なお、攻撃を加え、相手を潰し、自国の利権を追求している。恐怖に基づく侵略と破壊を繰り返し、多くの尊いのちを平気で奪っている。

まるで、未熟な幼子に危険極まりない武器を与えてしまったかのようにすらある。傍若無人で極悪非道極まりない横暴の現実をまのあたりにしている。

醜いことに、この世に生き地獄をもたらしながら、平和の名の下に、平然と自己正当化し、自らの政治的プロパガンダをアピールする偽善者は、不気味にも微笑みすら浮かべている。

日々、犠牲になる人々の苦しみを直視すればするほど、このような世界の状況とおのれの無能さに地団駄を踏み、無能極まりない自身に激しい憤りすら覚える。

それにしても、このありさまはなんということであろうか。まるで、これまで積み重ねてきた人類の文明の進歩とは裏腹に退行化している。人類の叡智とされてきた学問の府である大学ですら、自国第一主義という前近代的思考による人種差別的攻撃にさらされている。啞然として言葉もでない。

このように、文明が地球規模でグローバル化する中で、権力を手中にした一部のものの前近代的、

反動的、未熟意識の愚行が跋扈する現実、しかしながら、かなり厳しいものがあると思わざるを得ない。

古代密議にウロボロスという象徴があった。自らの尻尾に食らい付き食べ尽くす龍のことである。「自滅」の道をたどる愚行を象徴している。

今起きているロシアやイスラエルの蛮行による惨状は、皮肉にも彼等が信奉しているであろう予言者イザヤの書に克明に記されているのだ。まさに滅びの構図にあるといわざるを得ない。

それにしても、われわれは無能のあまり、ただ手をこまねいているしかないのだろうか。

しかし、いまのわれわれがこのまま手をこまねいているだけならば、いま生まれ、これから生まれてくるもの達の未来は全く暗いと言わざるを得ない。新たないのちにとって、飢えと渇きと死が待ち構えている暗黒の世界に陥ってしまうだけではないのか。しかも、すでにそれは、現実には起きている事実でもある。他人ごとではないのだが。

では、このような惨憺たる世界の現実のなかで、われわれひとりびとりに問われていることは、一体、何であるのだろうか？

それは、たとえ、世界が潰れようが、あなたのいのちはあと数ヶ月だと余命宣告されていようが、あの200数十余人が搭乗したジェット機が離陸して数分で墜落し炎上し、一瞬にして尊い人生といのちを失ったように、いつでもわが身にふりかかる理不尽な非常事態に直面させられていようが、そのとき、われわれが出来ることといったら、一体、何であろうか？

それは、ひとりひとりが現実には遭遇している「いまという瞬間のありのままの事実」に向き合うことしかないという現実であろう。逃げ場のない現実ならば、動転しようが、絶望しようが、神にすがろうが、われわれは、いま襲いかかる事実に向き合うしかない。

あるがままの現実に向き合ってこそ、その覚悟にこそ、ひとりの人間として、全きいのちとして、理不尽な状況の中で唯一、正気を失わず、光り輝くいのちとともにある。

それはまさに、あるがままの事実に向き合うときにこそ生死を超えた大いなるいのちの尊厳が顕わになり、自ずと道が開かれるということなのであろう。

個人であろうが、国家であろうが、世界であろうが、危機に瀕した際に、「ひとつのいのち」として正気を失うか、失わないか、人間はいつでもどこでも問われているように思われてならない。

そして、「ひとつのいのち」としての正気を失わせる最大の要因は、個人であろうが、国家であろうが、世界であろうが、人間のみならずあらゆる生き物たちがその「いのち」の存続の危機に瀕するときに、動揺し、混乱し、正気を失う。それは、死に対する本能的防衛心や恐怖心に他ならない。ならばこそ、人間は、ひとりびとり、滅びや死に対する不安と恐怖の事実に向き合うことが大事であることになる。

まさしく、正気は現象を超えたところ、生死を超えたところにある当のものである。

われわれは、いま、世界の混乱に対して、全くの無能でしかないのだが、しかし、自己の人生に対しては、全く、正気であらねばならない。

まさに正気こそは生死を超えたところにあり、生死の恐怖を超えて初めて人間は武力や戦争という暴力から解放されるのではないだろうか。もちろん、死を賭してわが愛するもののために戦え、などということとは全く異なるものである。

死の恐怖はどこにあるのか。それを直視し、見極めることがなければ、人間は死の脅しや恐怖におびえていなければならない。その恐れがあるからこそ、一方では、暴力に訴え、死の恐怖を食い物にして、際限も無く戦争を繰り返すこととなる。

支配力や権力、権威を笠に着るもの達を見てご覧なさい。みな、自己の幻想にしがみついて固着するばかりである。そして、昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵。信じられるものは誰もいない。というより、自己優先の恐怖心からくる猜疑心の塊である。したがって、自己の飽くなき権力志向によって自分の首を絞めている。そして、彼らに取り込まれている者達を見てみたまえ。恩恵の奴隷と化し、媚びを売り、偽善と欺瞞の薄笑いを浮かべながらただ脇に立っているだけではないか。そしてわれわれはというと、こうした偽善者達を無視できない現実にあたふたするばかりである。

まず、肝心なことは、いま、我が身に起きていること、世界中に起きていることをあるがままにきちんと向き合いその事実を観ることから始まるのであろう。

さて、慶徳孝一先生から「心の通信」の再刊のご連絡をいただいた。小生は未熟者であり、はたして、慶徳先生のご主旨に適えるものかどうかは甚だ疑わしい。何よりも、読者諸氏のご期待に添えるものであるかどうかは不明である。

しかるに、なにゆえ、自身の非力を顧みず、心の通信の執筆をお引き受けしたのかといえ、ひとえに、この激動と混乱の現代から、未来の世代にむけて、生死を超えた人間の課題について、ひとりびとり、自分自身によって取り組むしか、暴力のない世界はもたらし得ないのではないかという強い危機感があるからである。ご理解賜りますれば幸甚である。

萬歳楽山人 龍雲好久